

フランスに於ける俳句の現況

玉井 崇夫

La situation actuelle du haiku en France.

Takao TAMAI

イギリス人のR. H. ブライスは、日本政府の招請により、大正13年に朝鮮の京城大学で教鞭を取り、昭和15年に日本へやって来た英語、英文学の外人教師である。ブライスは、昭和24年から27年にかけて英文の『俳句』4巻を上梓し、俳句研究によって文学博士号を得ている。桑原武夫が『第二芸術』を「世界」に発表したのは、昭和21年の11月号である。日本人が自国の伝統的な文学形式を否定しようとする戦後の風潮の中にあって、このイギリス人は「バッハの音楽や中国の絵画と共に、生涯もっとも偉大な、もっとも純粋な、もっとも変らない喜びを与えてくれたのは俳句であった」と書いているのである。彼の墓は鎌倉東慶寺にある。彼自らが「山茶花に心残して旅立ちぬ」と辞世の句を詠んでいる。

現在、フランス人にブライスほど俳句に学殖と情熱を具え持った研究家あるいは文芸愛好家がいるかという、はなはだ心許無い。ちなみに今、フランスで出版されている俳句に関する書物は30点を越えないと思う。手許の書誌で調べて、古いものでも1984年の刊行。一般に、ドイツ人の俳句に寄せる関心や趣味と比べても、この面でのフランスの現況はお寒い限りである。

芭蕉の有名な句「夏草やつはものどもが夢のあと」を、ブライスは、可能な限り原句に忠実かつ詩的に

次のように英訳をしている。

Ah ! Summer grasses !

All that remains

Of the warrior's dreams.

ドイツの漂泊詩人ハウスマンは、芭蕉の原句と照
応した意味深い短詩に独訳している。

Blühendes Gras auf dem alten Schlachtfeld,

古戦場に生い茂る草

den Träumen entsprossen

戦死したつわものどもの

der toten Krieger. 夢から萌えいでた草

それでは、フランス語ではどのように訳されてい
るか。

les herbes d'été 夏草

seules traces ただ跡のみ

des rêves des guerriers 戦死たちの夢の

味も素気もない、ただ言葉を置き換えただけのもの
である。いずれにせよ、言葉遊びの好きなフラン
ス人ではあるが、俳句とは、まだ相当の距離があり
そうである。